

その他の文書⑩

ここで紹介する文書は、家城分教会（三重県一志郡、岩崎芳和会長。旭日大教会）に所蔵されていたもの。初代岩崎乙五郎は、明治24年に入信。以来、熱心に信仰し、明治31年5月23日に名称の理をいただく。

文書は次の通り。

- ①「拾七号古記御筆先 巻号ヨリ六号迄」
- ②「無題」。(「おふでさき」第七号～第十号)
中扉に「岩崎乙五郎所有」、その見返しに「第七号」とあり、裏表紙に「一志郡家城村 天理教家城宣教所 岩崎乙五郎 明治二十六年」と記される。
- ③「無題」。(「おふでさき」第3号25～133、17～24、9～16)
- ④「御筆佐記」(第1号～第9号)
明治卅四年吉日 岩崎乙五郎
- ⑤「御かぐら歌講義」岩崎寅太郎。
- ⑥「泥海古記 神ノ古記御筆佐記 岩崎乙五郎」
- ⑦「泥海古記 大正八年二月吉日」
- ⑧「神道家城布教所 神道天理教会教祖由来 岩崎氏」
- ⑨「天理教会□□□記 明治参拾六年正月廿三日」(□は破損)
- ⑩「明治三拾六年三月廿八日 神道天理々分道」
家城布教所 岩崎乙五郎所有
- ⑪「無題」(表紙なし)
- ⑫「身の内借物と理分道話 昭和二年三月吉日」
裏表紙に「此ほん何方へ御かし申ても 早々御らんの上 御かへし被下され度御頼み舛 岩崎」

①～④までは、「おふでさき」の写しである。その個々のお歌をみていくとき、上の句がぬけていたり、また逆に下の句がなかったり、さらには、お歌の語尾などが相違したりと、いろいろな欠落箇所をみるものである。

⑤は、4代会長の手になるもの。表題通り、「みかぐらうた」のお歌一つひとつに、解釈説明がある。⑥～⑦は、こふき話が記されている。⑧は表題通り、教祖小伝である。

⑨は、いろいろな話が記載されている。但し、表紙及び5丁分に、ねずみに囁かれたものなのか、破損がみられる。

⑩は、病のさとしが記されている。⑫にも、病のさとしが記されるが、それには十柱の神の守護、つまり、かしまのかりものの説き分けが、最初に書かれている。その点は、同じ理分けとの表題をもつが⑫とは異なる。

⑪は、表紙が欠損しているの、表題は不明だが、その内容は顔相などを含んだ病のさとしである。

ここで、⑨について、少し翻刻を試みておこう。これは、すでに触れたように、表紙が半分ほど破損しており、表題も全部翻刻することはできない。また1～5丁まで、下の角が少し破損している。

そこで、10丁オから紹介する。

八ヶ条の心間違

ほしと申舛も、ほしい心ハなけりやならん者て舛。日々家業多勢ニ働、はたらいたゞけの、あたゑほしいハよろしいなれ共、

心尽さづ、はたらきもせず、金銭ほいかり、金銭無して吉飲物ほしかり、吉衣類ほしかり、吉男ほしかり、吉女ほしかり、すべてほしいまゝと云が、埃りになり舛。

又、惜みと云も、惜む心もなけりや」(10オ)

なりません。古い衣服や古い品物お、まだまだ捨てハと思、あかをとして使ゑ、結講や。捨てハおいしいと思うのも、よろしいなれ共、ほね惜み、働惜み、上の人おみて、のびのびして、人の為ニハ尽惜み、人の為ニわほね惜み、たさねばならん者出惜、又、まけ惜み、すべて惜み、をしむのが里にかなわん」(10ウ) かわいゝと云もなけれハならん者で有舛。我子かはいゝ、我身かわいゝハちがいないなれ共、我思て人ハどふでモよい思。人のなんぎハかまわん、人のふじゆハかまわん、道ハたおれもかまわん、我身さいよけりやよい、内さいよけりやよいと思。我身らくして人おくるしめ、我身お引て人おわるうしい、我子のあいに引れて、人の子悪うするのが埃りとなり舛。(11オ)

にくいと云ハ、我為思て云てくれる人お、悪う思て、却て其人おにくみ、嫁おにくみ、養子おにくみ、人のきらう事お言てハにくまれ、人のきらう事おしてわ、にくまれ、すべてにくみにくまるゝのか埃となり舛。

又、うらみと申舛ハ、人よりなに事おゆハれても、しられても、我身悪うないのに、ゆわれそふな事ハない、しられそふな事ハないと思て、我身をうらんでいれハ人おうらむ事」(11ウ)

ハないし、うらみられる事もない。なれ共、我身の事ハ外ニして、人が悪い、人が悪いと思。あいつ、あのがきが思てうらむのハ埃ニなり舛。

はら立と云ハ、心お大きくもちて、我心お人の心に合せるよふにしていれば、はらたてる事もなし、腹立さす事もないなれ共、人の心お我心に合せよふとする、しい心が少いさいから腹立、腹立さしたりするが埃りになり舛。」(12オ)

よくと云のも、人間と云者ハなくハならん者で有舛。なれ共、ちかよくおして、舛の目おぬすび、はかりの目おぬすみ、人の女房おぬすみ、人の男おとり、又てかけこしらゑ、こふよくしい、又とんよくするのが、ほこりになり舛。

又、こふまんと云のハ、金持の人ハ金持のけんおふり、人お眼下に身下シ、又上みたる人ハ上お笠にかむりて」(12ウ)

おれがゑらいと思て、人お眼下にみくたし、こふまんし、又、物しりたる人ハ、しりたる面おして、ゑらそふにおれ程ゑらい物ハないと思て、こふまんするのハ、ほこりになり舛。物しりたる人ハ、しらん人に、あの人ハ、なんにもしらんかわいそふな者と思て、教ゑさとすが誠の心てあり舛。よハい人や、下々にわ、かわいそふな者と愛お以て、そだてるよふ、ひきたてるよふにするのが誠であり」(13オ)

舛。誠ハすなわち天の理にかなうのであり舛。天の理ハ誠てあり舛。誠ハ神様てあり舛。神様ハ誠なれハ、誠の心になれば、神様の御心にそうのであり舛。そハすれハ、神様ハ充分の御守護を受るのである舛。充分の御守護受たなれハ、火難盗難水難、又病気病難、皆のがる者で有舛。目ハ此天地間に有止有ゆる者ハ皆」(13ウ)

神様の御造り下された物で有舛。病気病難ハ神様ハ拵ハせぬ。人間のからだに出来る物ハ、人間心で造る物である。世界ハ神様が主であり舛。人間からだハ心のまゝにつかハしてもらい舛。

心ハからだの主である。すれハ心通りのりが、からだに出る物
て有舛。すれバ誠の心で通るなら、誠の理か出る。悪い心で通
るなら、悪い理が出る者て有ある。そこで神様ハ御樂歌に」(14 オ)
七ツ なんぎするの心ろから わがみ恨みてあるほどに
八ツ やまいハつらいものなれど もとおしりたるものわない
九ツ このたびまてわ一れつに やまいのもとハしらなんだ
十と このたびあらハわた やまいのこもハこゝろから (14 ウ)

以下、「天理教会御話」「神功皇后」「正月話」などの表題が
ついた文章があるが省略する。27 丁裏の後半から「おはなし」
と題されたものがある。それを翻刻しておこう。

おはなし

みなさま、今夜ハさむいのに、御いともなく、よふこそ御参
拝なし下さり舛した。誠にかたじけなく存舛。私のよふなもの
が、皆様の高座にすわ」(27 ウ)

らしてもらいまして、皆様に神様の御咄を取次さしてもらいま
して、皆様に御まんぞくおしていただくよふな、ひかゑのある
よふな、我々てハ御さりません。なれど、べんきよのために、
いさゝか御取次さしてもらい舛故、しばらくの間、御耳御はい
しやく致舛。今迄ハ世上世界で云ている人間身上ハ四百四病の
病の入物である。今日こふしていれ共、あす日、たれが煩うや
ると云て心さむ」(28 オ)

しいくらししていなさる御かたがあり舛。なれ共、当神様の御
さとし降さり舛にわ、人間身上あ病と云て、いささかないもの
であるよふ、かんがゑてみよ。世上世界の万物、又人間身上まで、
神かこしらゑた物である。人間わ神の子である。世上世界に加
愛い我子に、をまいハ是て難義せい、あれで難義せいと云よふ
道ハ、親ハあたゑそふな事ハない、どうりハない。病の元ハ」
(28 ウ)

皆心からと云て、病ハ心が作た物である。神ハそのよふな難義
ふじゆする為に、病と云よふなものわ、一つもツけをけせん。
なれ共、我と我手に、なんぎふじゆするたね、まいていのや
でと、御聞せ下さりましたあり舛。病と云物ハ一つもないなれ
ど、人間ミ上に、くびから上に、目耳はな口と云、四ツのやく
どうぐかあり、その四ツの役道具のかじのとりよふにより、目
でみてわほこりをつけ、耳で聞てわ」(29 オ)

はらを立て、はなて人のはないきをきいてわ、うたがいおかけ、
口て云てハ、人に腹を立てさし、つこふべき処ゑ使ハすして、
ゑてかんでのほふゑ、使て通るに付て、天ねんしぜんのりにせ
まり、なんぎふしゆうするのやで。人間ハ四百四病の病の入物
であると、してしまうのであると、御聞し下されたのであり舛。
そこで、それよき方に使て、誠真心さいをさめて、日々通りさ
いすれバみ」(29 ウ)

上ハやまい、なやみと云てハ、いさゝかないと、きかしてもら
いました。

又、此世ハ九のどや、九の世界やと、よふゆうたものやなあ。
ねてもをきても、くやな人間と云者ハ、しんばいのある物やな
あ、と云てなんぎするのが、あたりまいのように、通っていな
さる御方があり舛が、なれ共、神様ハそんなしんばいするのお、
九のと九の世界と云のやない。九のどと舛舛ハ、人間ミ上に、
首から上に、四ツのどう」(30 オ)

ぐ、首から下に手々足々、男女共前の一の道具、是て五ツ、都
合九ツの道具お、御あたゑ下されて在舛。そのりによんで、九
のどうと云せてある、御聞せ下されたのであり舛。それさとり
ツけさしてもらい舛れば、それ人間におきましてあをいどと云
て、ゆゑんゆハんのりおきゝ合たのふさしてもろて、人様に十
のどうぐのりをかたとり、人様を十分の道を通して、我み、そ
のいつのりをたん」(30 ウ)

のふさしてもら通るなれハ、なかよく、むつましく通る。是を
九のどうと云ふ。九の世界と云のハ、夜の九ツを子の時と定メ、
ねハ元と定メ、元ハ子時、ねハ九ツ、九を初めとしい、又ひる
の九ツハ、ひる午の時、日中としい、是て九々のせかい。是て
九の世界と云ているのやでと、御きかせ降されたのであり舛。
すれば人間ハ九のど、世界ハ九の世界なれば、人間物事九にを
さめ、十分の道を我身とうら」(31 オ)

んよふにして、我身ハ九で通るよふにして、となれば、誠の道
に可舛。誠の道が天の理て在舛から、皆様ハ御じよさいハ御座
り舛まい。なれ共、此行先ハ誠真て通て載きたいが為に、い
さゝか御取次おさして載ました事て御さり舛。私ハ此辺で、たい
席おさして載き舛。」(32 ウ)

続いて、「罪障消滅御話」「此借錢ハ誰が払」「御樂歌」「蠅は
蜘蛛トノ話」「御樂歌ニ付テ話」とあるが、ここで「御話」を少
し翻刻紹介をしておく。

偕て、此吾々人間は、如何なる処から出来ましたもので有まし
よ。太古の事は姑(シ)ラく措、現に此処に居舛、吾々人間は、
則ち如何なる処から出来ましよ。然らば、其親有て出来まし
たと答へられましよ。然らば其親其親々々と、段々元ゑ元ゑと尋
ねましたならば、人間の一番御先祖にかゑるて有ましよ。其一
番人間の親は誰で有ましよか。何と言御方てありませう。
此世二元がのうて、育つて有者はありますまい。則ち神様て有
ませう。夫を思はず、日々とう」(45 オ)

つてをる、天の大神様が世界人間親て有ましよ。天の大親様を
人間の一番元の親と致しますれば、世界人類は兄弟と言事が分
り舛。(45 ウ) 以下略

「八ツノ埃善悪ノ歌」

ほしい善 何ものがほしいと思ふ心あらば、身をはたらかせ、
とれや世の人

悪 はてしなくほしいと思ふ心こそ、いたみなやみとなるそ、
世の人

をしい善 さゝいなるものをも神の恵そと、深く思ふてをしめ、
世の人

悪 身をしみや、骨のをしみや出しおしみ、これが病となるそ
世の人 (53 オ) 以下略

※ 2006 年以来今日まで 6 年間、貴重な誌面をお借りして、手
元にある明治期の教理文書を順次紹介、翻刻を試みてきたが、
ここで一旦終了したい。なお、「こふき話」に関する資料は、
ここで一旦終了したい。なお、「こふき話」に関する資料は、
あえて翻刻を試みなかった。それは、中山正善『こふきの研究』
において、いくつかの資料が紹介されており、この稿で触れ
るのは、屋下に屋を架す、ごときものと考えたからである。